

◆伊藤洋二 選 ～「諳んじたい俳句 88」～

硯洗ふ墨あをあをと流れけり 橋本多佳子

「雪はげし抱かれて息のつまりしこと」「祭笛吹くとき男佳かりける」「恋猫のかへる野の星沼の星」…。迫力に圧倒され胸が苦しくなる。松本清張の短編「月光」を読んでみよう。主人公の「万分の一」が判るかも知れぬ。

コスモスの押し寄せてゐる厨口 清崎敏郎

「COSMOS」は、「秋桜」とも、秩序と調和の表われとしての「宇宙」とも訳される。家計の三要素「ヒト・モノ・カネ」が自由に出入りするお勝手口は、女性の領分である。仲秋の午後、山の神ならぬ万能の神が厨口でお喋りの真っ最中。最近退職した主人の「あれそれこれ」が話題の種だ。「鶏頭の啄んでゐる癩の種」。

うつくしきあぎととあへり能登時雨 飴山 實

「あぎと」とは、顎（あご）のこと。人の横顔を見たときに鼻の先端と顎の先端を結んだ直線を「エステティック」の頭文字から「Eライン」と呼ぶそうだ。人差し指を鼻先に当て、鼻と顎をつないだとき、指に唇が触れない人は、美しい横顔の持ち主だとか。つまり、鼻が高く口が引っ込んでいて、顎が適度に出ていることである。大阪発一新潟行の夜行急行「きたぐに」が石動駅を過ぎる頃、時雨の車窓をじっと見つめる三号車自由席の「あのひと」の「いいライン」。さあ、もう直ぐ富山だ。二人の旅は続く。

落葉松はいつめざめても雪降りをり 加藤楸邨

定刻の八時三十分に師走の新潟駅に着いた。万代口から、旧齋藤氏別邸庭園へ歩む。駅前の看板は、あの当時と変わっていなかった。萬代橋の辺りでちらりほらりと初雪が。喫茶店に入り、二人で朝食を摂ろう。座ると瞼が重い。ついウトウト、Z Z Z…。目覚めると、パソコンの前。何時の日か正夢になりますように。「思い出はいつねむりても春の夢」。

家々や菜の花いろの灯をともし 木下夕爾

今や照明の主流はLED電球で、白熱電球は暫くすると地上からなくなるかも。

新顔の寿命は約四万時間。一日に五時間使うとして約二十年。筆者の方が早く切れるかも知れぬ。足腰を鍛えて電球交換を生きている証としよう。とは言いながら、時の流れと老いは如何ともし難し。「行春や半導体のお灯明」。

夕顔やひらきかゝりて嬖深く 杉田久女

脱帽です。「花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ」「たてとほす男嫌ひの単帯」「ぬかづけばわれも善女や仏生会」「東風吹くや耳現るるうなみ髪」「虚子嫌ひかな女嫌ひの単帯」「白妙の菊の枕をぬひ上げし」「われにつきみしサタン離れぬ曼珠沙華」。清艶で高華な近代女性俳人の句に、ただ慄くのみ。

一つづつ灯を受け止めてさくらんぼ 右城暮石

「閑さや岩にしみ入る蟬の聲」。山形領、立石寺を訪ねた折の帰路であったろうか。幟に誘われ往くと、「佐藤錦」と云う温室育ちのお嬢さんが嫁入り支度中であった。また、とある老舗の百貨店では、「赤い宝石、「光る宝石、の競演。勝負の軍配はどちらに。

夜の卓智慧のごとくに胡桃の実 津田清子

素浪人、月影兵庫は、あの剣豪スター、近衛十四郎さんが胡桃を二個持ってそれを鳴らしながら諸国を放浪する痛快時代劇である。胡桃の嬖は脳の皺にそっくりだが、胡桃を掌で回すと脳の活性化になるとか。胡桃回しで脳を刺激し、滑稽句もすらすら。毎月の投句のお陰で脳の検査結果に異常無し。

山河けふはればれとある氷かな 鷺谷七菜子

冷たい飲み物を「氷無し、で注文する人が増えているそうだ。しかし、ある知人は、氷入りで注文し、しかもその氷を残さない。勿体無いと云う。年中氷があるのは当たり前ではない。氷は電気のお陰と云う。山に積った雪も水になるから発電出来るのだとも。うっかり転寝の電気点けっ放しに御用心。

大櫓をかへせば裏は一面火 高野素十

大櫓(おおほだ)とは、切り株を乾かせた焚き物のことで、一度火が点くと良く熾る。年末年始の火災予防運動で消防団員が「火之要鎮」を呼び掛ける。標語は、「消しまししょうその火その時その場所で」。「すませよう延ばし延ばしの我が

用事」。

白鳥といふ一巨花を水に置く **中村草田男**

渡来地として有名な瓢湖で初めて観た。白鳥とはカモ科の水鳥の総称のことで、オオハクチョウが代表らしい。兎に角、大きくて迫力があり、羽根を伸ばすと約八尺の巨漢で、離着水時は白い飛行艇だ。『一巨花』とは、けだし名言。

教会と枯木ペン画のごときかな **森田 峠**

巡礼を始めたきっかけは、『納経軸』との出会いからで、坂東三十三箇所第二十八番札所、龍正院の滑河観音様を拝見してからである。それから利根川沿いに銚子へ。犬吠埼灯台をペン画で描く。浅草寺の雷門も。これにて八十八句も結願である。